

『長野県中央図書館報』にみられる日中戦争下の文庫活動について：時局文庫を中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 司書課程・司書教諭課程研究室 公開日: 2025-01-17 キーワード: 作成者: 新藤, 透 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000507

『長野県中央図書館報』にみられる 日中戦争下の文庫活動について

——時局文庫を中心に——

新藤 透

1. はじめに

戦前（1945年以前）の公共図書館がどのような活動を行っていたのか、それを窺う格好の史料に「図書館報」（以下「館報」と略す）があげられる。館報とは「図書館のPR活動のメディアの一つとなる定期刊行物。図書館の正しい姿を知らせ、利用者と図書館の結び付きを強めるためのコミュニケーションの場であり、各図書館でその趣旨は異なるが、おおむね図書館の行事、お知らせ、図書館の使い方、利用者の声、資料紹介などの記事を含んでいる」¹⁾と図書館界では位置付けられている。

館報の歴史は古く、石井敦によれば1902年（明治35）6月に創刊された私立成田図書館（現・成田山仏教図書館）の『私立成田図書館報告』ではないかという²⁾。また石井は戦前の「館報史」をスケッチしており、管見の範囲では後続する研究が見当たらないので、貴重な先行研究といえる³⁾。

紙幅の都合から石井と竹林熊彦の論考を紹介することは叶わないが、これらの研究によると一次史料として館報は歴史研究に活用できると考えられ、さらに近年奥泉和久も館報の史料性を指摘している⁴⁾。

また館報の史料性は復刻されていることから明白であろう。近年では1905年（明治38）4月から1943年（昭和18）まで発刊されていた『山口県立山口図書館報告』が、全号ではないものの金沢文圃閣から復刻されている⁵⁾。

近年、筆者は日中戦争と太平洋戦争の戦時下の公共図書館の活動に着目し史料収集を行っている。本稿では、昭和初期に県立長野図書館が実施した時局文庫の活動を館報から探っていきたい。もちろん館報だけで時局文庫のすべてが解明できると筆者は認識していない。本稿はあくまで着手研究として発表するものである。

2. 戦前の県立長野図書館の「館報」

県立長野図書館は1929年（昭和4）9月に開館した

が、当初は館報などの広報誌は存在していなかったようだ。第2代館長に乙部泉三郎が就任すると、その指導により1934年（昭和9）6月に『県立長野図書館報』として創刊する。翌1935年（昭和10）9月発刊の第5号から『長野県中央図書館報』と改題する。これは県立長野図書館が文部省から中央図書館の指定を受けたことによる措置であろう。ちなみに館名は変わっていない。

1940年（昭和15）1月発刊の第26号から『信州の図書館』と改題した。これは長野県図書館協会結成の機運が働いていた時期であり、図書館だけではなく学校や書店など、図書館事業に関係がある人びとまで読者として想定してのことであった⁶⁾。さらに同年6月刊行の第31号から『読書信州』とタイトルを変えており、これは長野県図書館協会が結成されてからは協会の機関誌としての性格が強くなったためである⁷⁾。太平洋戦争の激化により1944年（昭和19）3月刊行の第74号をもって廃刊となった。

刊行頻度は一定しておらず、当初は年4回の発行であったが、1939年（昭和14）2月からは月刊となった。

3. 第1回時局文庫

時局文庫とは県立長野図書館が蔵書から「時局」関係図書を選書し、これを「時局文庫」と名づけ、希望する県下青年団に図書を送付するものであった。

この事業は国民精神総動員運動と深い関係がある。1937年（昭和12）7月に始まった日中戦争の影響で、同年8月に国民精神総動員実施要綱が閣議決定されたのを受け、10月に国民精神総動員中央連盟が結成され、第1回国民精神総動員強調週間が開始された。県立長野図書館ではこうした「時局」の見地から時局文庫事業を始めたのである。

時局文庫は1938年（昭和13）6月中旬には、都市部青年団19箇所にも100冊ずつの「時局パンフレット」を配布し⁸⁾、12月には農村部の青年団へパンフレットを平均175冊配布してその閲読を村民に求めている⁹⁾。

時局文庫に選書された図書は「国民精神の作興、国防知識の普及、勤儉貯蓄の奨励、東亜問題の認識、移民問題の識認（ママ）、科学知識の普及に重点を置いたものであり、主要地には県立図書館の司書が直接出向いて説明を行っている¹⁰⁾。

農村部青年団向けに県立長野図書館が策定した「時局文庫実施要項」にはその目的や実施方法が記されている¹¹⁾。

一、趣旨

県下男女青年ヲシテ時局ヲ認識シ之ニ対処セシムル為ニハ各種ノ方法アランモ文書ヲ通ジテ行フハソノ一良法タリ。本館ハ左ノ事項ニヨリ之ニ関スル書物ヲ積極ニ交附シ其ノ閲読並ニ読了後ノ座談会等ノ開催ヲ勸奨セントス

二、時期

昭和十三年十二月以降

三、編成 ソノ内容別紙目録ノ如シ

四、読者 農村男女青年ヲ主トス

五、費用 一切本館負担トス

六、読了後ノ書物ハ貴青年団ニ保存ノコト

七、報告 実施後ハソノ状況報告ヲ乞フ

報告ハ特ニ左ノ点ニ願ヒ度シ

- 1 得ル所ガ有ツタカ
- 2 ドノ書物が良カツタカ
- 3 今後ノ継続ヲ希望スルカ
- 4 其他ノ希望・感想等

以上

さらに各村から報告された「時局文庫」利用計画(報告抜抄)も掲載されている。以下、一部を紹介する¹²⁾。

埴科・東条村青年会

一、男女青年団並に青年学校生徒に巡回貸出をなし時局認識の為大いに利用仕る可く候(中略)

東筑摩・寿聯合青年団

直ちに支部長及修養部員を召集なし、文庫は南北両支部に分け、閲覧期間を各支部二日宛として回覧することゝしました。一巡すれば本部に保管、現在ある図書と合置して巡回又は本部貸出として益々利用します。座談会は是非開催します(中略)

南安曇・小倉村青年団

一、同種類の小冊子は男女青年団に於て回読す

る

一、我々に特に必要と思はれるものを選んで輪読会をなす事とせり

一、其他の小冊子は図書館に保管、一般に貸出す事とせり

時局文庫の目録は、1938年(昭和13)12月現在の「県立長野図書館「時局文庫」目録」として『長野県中央図書館報』第14号の77頁に掲載され、98冊が確認される。

日中戦争は1937年(昭和12)7月7日の「開戦」から一年半を過ぎ、中華民国の首都南京を日本軍は陥落させたものの、蒋介石は徹底抗戦の姿勢を崩さず、戦争は長期化・泥沼化の様相を呈していた。

日中戦争が長期戦化の様相を呈してきたので、国民の間に厭戦気分が漲らないように、このような図書を選定して時局文庫としたのであろう。

4. 第2回時局文庫

1939年(昭和14)10月にも県立長野図書館は第2回目の時局文庫活動を行った。それを行う意義について館長の乙部は次のように述べている¹³⁾。

支那事変も三ケ年に亘り、蔣政権の没落も時日の問題となつたと見られるが、大東亜新秩序の建設はこれからである。事変が長期に亘れば亘るほど、国民読書の問題は重要になつて来る。大東亜の盟主としての日本が、亜細亜八億の民衆を指導し行くには、その武力に於て優秀なると同時に文化の程度に於ても亦断然傑出して居らねばならぬ。国民読書の問題は決して個人の利益を本位として考へらるべきものではない。読書は曾ては一個人の知徳の研鑽のためと考へられてゐたが、今日とは異なる個人的のものではなくなつた。国家の一員として御奉公を致す為の準備である。

「大東亜新秩序」建設のためにも読書というのは極めて重要な営みであると乙部は力説している。図書館は戦時下には不要であるとの批判を逸らすためにこのような「国策協力」的な発言をしたのであろう。読書行為も一個人の「知徳の研鑽」のためのもので

はなく、戦時下では「国家の一員として御奉公を致す為の準備」であると読書が必要な行為であると主張している。

時局文庫の申込期間は同年10月1日から11月15日までで、12月以後に時局文庫が発送された。下記に「時局文庫要項」全文を引用する¹⁴⁾。

時局文庫要項

- 一、趣旨 時局下の修養に資すべき書物を選択して之を配布し読書の習慣を涵養すると共に、読書による教養を高めしむるにあり
- 二、申込時期 昭和十四年十月一日より同十四年十一月十五日まで。
- 三、発送時期 昭和十四年十二月以後
- 四、図書の種類 別記の時局文庫目録中より、各館にて希望のものの総額約十円以内を指定して申込むこと
- 五、申込資格 県下公立図書館長、文庫長。(学校図書館を除く)
- 六、配布する書物は返送を要せず。自館の蔵書として利用の事。
- 七、書物は各館の申出揃ひてより、発行所に注文してその上配布するものなれば、各館は期限前なるべく速に申込むこと。
- 八、図書費及郵送料 一切中央図書館にて負担す。

第2回目の時局文庫は、前回と異なり「国家・国民・日本精神」「哲学・修養・美談」「経済」「軍事・国防」「家事・家庭・生活」「産業」「農村・移民」「其他」の8部門に60冊の図書を分け、各図書館に送付する図書を総額10円以内でこの中から自由に選択させたのである。何点か書籍名と著者名をあげてみよう¹⁵⁾。

「国家・国民・日本精神」

関屋龍吉『戦時に於ける国民の覚悟』

陸軍省情報部『国家総力戦の戦士に告ぐ』

「哲学・修養・美談」

福島政雄『人生問題と信仰』

朝日新聞社『上海北支 戦線美談』

「経済」

山本勝市『非常時局と経済生活』

「軍事・国防」

朝日新聞社『事変をめぐる 時局読本』

野口啓助編『国民防毒読本』

「家事・家庭・生活」

高野富子『子供の心の育て方』

永野健『福神漬読本』

「産業」

大日本青年団『産業線に輝く人々』

三好義春『塗装・モザイク・セメント工』

「農村・移民」

清水及衛『農家経営の実際』

三浦悦郎編『満洲移住読本』

「其他」

高橋刀畔『五人組制度の近代的復活』

乙部泉三郎『町村図書館の新経営』

第2回時局文庫の内容について、国策の本と農民たちが知っておくべき実用知識(家事・家庭、衛生観念、農業など)の二本立てで選書されている。筆者は実用書の導入は乙部の意見ではないかとかつて指摘した¹⁶⁾。乙部は著書で「農村の図書館は、どこまでも農民のものたらしむべく、土地の気候状況等を考慮して、特異性あるものを建てたいものである」¹⁷⁾と述べており、農民の生活安定や農業技術の向上を願っており、そのために役立つ書籍を農村図書館は所蔵すべきだと考えていたからである。

5. 時局文庫の終了——むすびにかえて

時局文庫は1939(昭和14)年12月に終了した¹⁸⁾。

「時局文庫」は、一館大凡十円宛、選択された別記の書物を一切無償にて交附すると云ふ全くの新計画であつたので、貸出文庫や巡回文庫と誤認した向も多いやうであつたが、左記の三十七館に対しては、規程により、その希望する書物を提供する事が出来たのは何よりも嬉しい事であつた。

(中略)

配布を受けた館に於ては自館の蔵書として十分満足なる活用を図つて貰ひたい。

尚又個人には此の文庫は無料提供することは

出来なかつたが、態々図書費を本館に送金してその斡旋を依頼し来つた方もあつた事を附記したい。

『長野県中央図書館報』によれば、県内37の図書館に希望する時局文庫の書籍を無償提供されたとある。

時局文庫は県立長野図書館独自の活動であったが、政府は国民精神総動員運動を開始し「国民精神総動員文庫」開設を各道府県の公立図書館に求めた。

日中戦争、太平洋戦争下の読書推進運動については先行研究の数も少なく、未解明の点も多い。県立長野図書館の時局文庫のような活動を発掘して個別事例を明らかにすることは重要であると思われ、今後はそういった視点での研究が求められよう。

謝辞

本研究はJSPS科研費JP20K12561の助成を受けたものです。

註

- 1) 「図書館報」日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典』第5版、丸善出版、2019.p.184.
- 2) 石井敦「館報論：現在の公共図書館の分析」『図書館雑誌』第49巻第11号、日本図書館協会、1955.11.p.2.
- 3) 館報史ではないが、石井敦以前に図書館報を研究対象とした論文に竹林熊彦「図書館年報の研究」日本図書館協会編『図書館論叢』第1輯、日本図書館協会、1942.がある。

- 4) 奥泉和久「図書館史の書き方・学び方：図書館の現在と明日を考えるために」日本図書館協会、JLA 図書館実践シリーズ24、2014.p.21.
- 5) 小黒浩司編・解題『佐野友三郎館長『山口県立山口図書館報告』：近代初期公共図書館のあゆみ』全2巻・別冊、金沢文圃閣、日本図書館学資料大系1、2023.
- 6) 県立長野図書館編『県立長野図書館五十年史』県立長野図書館、1981.p.23.
- 7) 前掲註6) 県立長野図書館編『県立長野図書館五十年史』p.23.
- 8) 「時局文庫」『長野県中央図書館報』第13号、県立長野図書館、1938.10.p.72.
- 9) 「農村青年団へ「時局文庫」提供」『長野県中央図書館報』第14号、県立長野図書館、1938.12.p.76.
- 10) 前掲註8) 「時局文庫」p.72.
- 11) 「時局文庫実施要項」『長野県中央図書館報』第14号、県立長野図書館、1938.12.p.76.
- 12) 前掲註11) 「時局文庫実施要項」p.76.
- 13) 乙部泉三郎「時局文庫の活動：戦時下図書館に告ぐ」『長野県中央図書館報』第22号、県立長野図書館、1939.10.p.121.
- 14) 「時局文庫要項」『長野県中央図書館報』第22号、県立長野図書館、1939.10.p.122.
- 15) 「長野県中央図書館時局文庫目録：此の目録中より選定して請求のこと」『長野県中央図書館報』第22号、県立長野図書館、1939.10.p.123-128.
- 16) 新藤透「乙部泉三郎の生涯と農村図書館論・選書論・読書論」新藤透編・解題『乙部泉三郎・県立長野図書館長：農村町村図書館経営論』別冊、金沢文圃閣、図書館学遺産セレクション3、2019.p.36.
- 17) 乙部泉三郎『農村図書館の探るべき道』県立長野図書館、1936.p.17.
- 18) 「絶大なる感謝感激を浴び乍ら時局文庫の配布終る」『長野県中央図書館報』第25号、県立長野図書館、1939.12.p.146.

(しんどう・とおる 非常勤講師・國學院大學教授)

